特 71
940

國文高等國語
科講義錄第三附錄

小中村義象述

家庭児訓すずめの子

301483-001-6

特71－940

家庭児訓すずめの子

小中村　義象／述

M25.12

AAE－0001

特71-940

特7
941

直文曰、君の御爲の文字全篇の骨子。

又曰、一篇の主意、まことにこゝにあり

談話体

雀の子

小中村義象

徳川三代將軍ゝ初の御名は、竹千代君と申して、御少い時より、至ッて利發な君であらせられた。この君の御附人松平長四郎といふは、大河内金兵衛久綱の子で、松平右衛門太夫正綱の養子である。生れつき利巧で、君より年は、九ッ上である。小供ながら、奉公の道も心得て、何事も、君の御爲をのみ、思てをッた。

君も御附人の多くある中にも、長四郎が、ことさらお氣に入りで、あツた。御菓子、めしあがるさも、長四郎さ分けて遣はせ、と、御意あらべし、めづらしき物あゞ、御覽にあれば、長四郎ふも、見せてやれと、仰せらる。かやうに、かはゆがりたまへば、長四郎は、小供心にも、この上もなき、ありがたき君ありと思ひ、たとひ死ンでも、この若君樣の、おためさあらぬやうな事はせぬと、忠義一邊に御奉公申した。

又曰、忠義の二字一篇の字眼。

又曰、兒童遊戯のさま、平敘し來りて、目ふ見るが如し。

ある時は、君を肩車に載せまつりて、高イ〳〵といひて、御殿中を、走りめぐり、或時は、馬さありて、匐ひまたるさ、君はその背に乘りたまひて、ハイハイドウ〳〵と仰せあがら、お遊びあ

さる。

女中どもは、君の御體大事と、御庭ふも、おろさぬやうさそるを、長四郎は、去ひて、御連を申し、飛石のあたり、御池のほとりあゞ、御手をひき伴ひ參らせ、何んでもつよくおありあそゞ參ねばあらぬと、ばかり、申してをツた。

君も、もとより、御利發な御方あれば、ぐずゝゝして、女中の手にのみあるを、れもしろからぞ思召して、何事も、長四郎のいふやうにあされた。

水と魚と暫くも、はなるゝことが、出來ぬやうに、若君樣と、長四郎とは、結びつけたやうで、君の御聲のそるところには、長

又曰、三代將軍の信綱さ於ける、幼時より結託せるを以ひて、暗さ結末の一段を伏せ。

文曰、はじめて題よゆる。

四郎が侍り、長四郎が、居るところにも、君は必ずおらせられるといふほどであッさ。かやうよ、長四郎は御氣入であッても、そこしも、驕るこゝろもなく、我まゝあるふるまひもせず、たゞ君のおためく〳〵と、夜も晝もおもうてゐた。大殿様も、御臺様も、長四郎は、よきつき人だ、と時々御褒美あど、下されて、おいたはりあそばせど、長四郎は、行届きませぬ〳〵といッて、涙ぐみして喜びかしてまッてをる故女中どもゝ、めづらしき小供よと、ほめぬものはあかつた。

ある日、大殿の、御寢殿の軒よ、雀が、チヨッ〳〵と、鳴いて居るよ、若君御耳が留ッて、アレ〳〵と御指さしあさる。皆ンナが

秋香曰、先其平日の事を敘して徐々本題に入る甚其体を得たり

ドコデスと眼を集めて、見べ、いかよも、御軒の尾に、虫などくはへて、飛びまはりてをるは、巣をくつたと見える。雛は見えざるかとのび上り〳〵をるゑ、尾の下より、喙さしだしたるがあるを女中ども、手をたゝいて、大さゝぎしてをる、若君も見ヤツ〳〵と仰せらるゝゑ、長四郎が、肩に御乘りあそべせとて、兩方の御足をシカと守りて御見せ申せべ、よろこびたまひて、アレ取りてつかはせと仰せらる。

誰かこの御役は仕るあど申す中に、君ゝ長四郎よ〳〵、そちはあれをとりてまゐれ、と仰せらるゝに、長四郎は、ハイとかしてまる。かしてまつたれども、どうしたらべ、道きぬやうよ、と

直文曰、よくきゝわけ云々い冐頭の利發の文字よりきたるもの

らるゝかと考へ、お断り申し上げやうかとまで思ッた。君はたきりに、おいそぎあさる。外の御つき人ども、君をおぐさめ申して、たべらく、お待ちあそばせ、晝は鳥もよく目が見えまそれば、長四郎を見て、遁げてしまッては、いけません、くらくあッてから、とらせて進じませうといふ。君はそのいふをを。よくおきゝわけあそばして、それあらこんやとツてくれよと仰せらる。

人々長四郎よ、お前は若君さまの、仰せつけであれば、是非取ッて御出あさい、體の大い人よりか、あんあとろに上るにゝ、お前のやうあ小供がよいからといふ。長四郎は、智恵ふかきもの

文曰、智恵ふかき云々い冐頭の利巧の文字よりきたるもの。

秋香曰形容し得て妙といふべし

あれど、さしあたりて、方法がつかねば、どうしませうといふ。人々よい事を教へて上る。今夜この御屋根に、梯をかけて斬づたひよ、御寝殿の上まで、旬ッて御出でよといふ。

忠義一邊の長四郎は、小供あがらふ、死んでも、この崖に、とりて上げねばあらぬと、手を組んで、日のくるゝをまつてをると、やがて、時の鐘、かすかにきこえて、夕日にふじの山の方にかくれた。若君は、御居間ふ御直りあろべして、燈の下にて、繪本あを見て、女中と相手で御眠い御様子。

長四郎に、御長屋の方より、梯をかつぎ出して、汗ながして持て来た。さうして、教へられた通り、屋根に打かけた、もう大丈

直文曰、このあたりの筆、巴戟天の特色

秋香曰、所謂頓挫の文法千鈞の重みあり

夫と、手拭を兩方の袖にとほして、襷のうはりに背ゐ結び、脇指一本さして、跳足にありて、梯子乗りかゝつた。靜にせねば、道げられるかも知らんと、思うて、息をこらして、上ッた。さうして、軒傳ひよ、大殿の屋根の方へ、匐ッて行く。晝見おぼえしておいた雀の子の居る巢を、一生懸命に、睨みつめてはひ上ッた。足ふるへてこはければ、巢を一ッ〳〵ワロリ〳〵と踏で行く。一ッ踏ミ、二ッ踏み、三ッ踏み、四ッ踏み、五ッ踏みて、ヤツト子の居る巢に近うあらんとした時、どうしさはづみか、踏をはづして、ころげ落ちた。大殿様の御中庭にひつくりかへつた。

将軍様の御輿といへば、虫も容易よ、入るおとは出来ぬよ、俄

直文曰、長四郎、何故ゝ竹千代君の名をいはぬか。これ長四郎につきての疑ふべき一。

又曰、殿様、何故ゝ長四郎を疑ふ。是殿様につきての疑ふべき一。

に、御庭よどうと音したれば、何事あらんと、上様にはみづから御立ちあされ、御床の御刀をッて、障子をサット御開き遊ばした。つゞいて御臺様も、燈火とつて御覽あさるゝと、御庭石のもとに、黒くうづまりて息つきをるものがある。誰だと仰せらるれば、恐れ入ります、長四郎で御座りますといふ。何長四郎か、どうしたことかとて、御様の下によびよせて、御たづねあらゞせば、かしてまりて、けふの晝、御殿の軒に、雀の子産んだるを見まして、ほしくて堪へられませぬにより、日の暮るゝを待て梯をかけて、軒づたひよ、とりにまゐりましたれば、過ってかゝる始末ふありましたといふ。殿様は、御笑ひあそばして、ろ

又曰、長四郎、何故に、實を以て答へざるの。これ長四郎よつきての疑ふべき二。

又曰、殿様、何故よ長四郎をだまして聞かんとするの。これ殿様よつきての疑ふべき二。

又曰、長四郎、何故よ白狀せぬか。これ長四郎よつきて疑ふべき三。

又曰、殿様、何故よろくまで長四郎を懲らさんとをるか。これ殿様よつきて疑ふべき三。

れにしても、己れがみつから考へついた仕事ではあるまい。誰かの使であらう、うの人の名をいへと仰せらる。長四郎は、いえ〳〵たゞあたくしの考でござりまを。わたくしがほしくあつたよりの出来心でござりまを。とばかりいふに、殿様も、御臺様も、いろ〳〵だまして、お聞きあされんとすれども、決して白狀せぬ。

殿様おけしきをそんぜられて、さて〳〵汝は年でろにも似ぬ不敵の奴である。よし〳〵懲らしてやらんとて、大あるる袋のありたるをめしよせられて、長四郎を、その中よ押し入れたまひて、口をべ、御手づから、紐よてくる〳〵と縛ばり、きびしく封

秋香曰、叙し得て綿密

直文曰、このわたりの筆また巴戟天の特色。

又曰、長四郎の白狀せぬ、實と以て告はざは、竹千代君の名をいはざる、皆君を思ふ忠義心。こよいたりてもドめてを三箇の疑を解く。絶妙。

又曰、長四郎の忠義心のほ宝寫し得て、また殘すとてろあし。

じて、柱よ掛させられて、有りやうみ申さぬと、いつまでえ、かやうにしておくぞ、食事も與へぬゞと仰せらる。

長四郎は、袋の中につるされて、ゞ〳〵してをれども、中々白狀しあい、白狀したらば、若君様の御上にかゝるとおもへべ、決して申し上げあい。殿は、番人をつけおきて、強情ものだと仰せられて、御寢あられた。

長四郎は、夜中にありても、番人がすかしても、決して、初の志をかへぬ。道る道ありても道げまいと思つた。死でもいふまいと決した。これで死ぬるも、若君様の御ためとおもひあんだ。

こんあ時に、御過のかゝらぬやうまをるが、奉公をるものゝ忠

義と思つた。

夜明けて、大殿起きせたまひて、また長四郎は、白狀せぬかさらば今朝の食事は、つかはもあを仰せられて、表に御出にあつた。

大殿の御心よも、御臺樣の御心よも、全く竹千代君のつかひあることは、知つて居らつしやる。たゞそれをいはせやうと、あさるこに、いはぬが、殿さまのお氣ざもりとあツた譯である、されども、御臺樣は、長四郎が、死でも竹千代君の御名をあらはさぬ覺悟を、深く感ぜられて、竊に女中に仰せあつて、かの袋の口を開かせて、朝飯を賜はり、又もとのやうに入れて、みづから御封じあろゝして、殿さまに知れぬやうに、かけておかれさ。

又曰、殿樣は竹千代君の命なるを知れり、たゞを知りて、猶長四郎よ白狀せしめむとをるはいらよ。これ殿樣よつきて疑ふべき四。

又曰、殿樣の阿責てくよりてきはまれり、長四郎の强情またこゝまいたりてきはまれり、發者をして、この後いあまかならむと、疑心をゆだかしむるとて陽大よ味あり。

畫ほど、殿さま入らせられて、又御責めあさる。長四郎は、袋の中より、たゞ私がわるうでさりました。いかやうとも、おされまし、だれもたのんだ人はでさりませぬとのみいふ。

御臺樣は、あはり長四郎を、氣の毒に、思召て、殿樣よ、むかつて申さるこやう、何れほど御責めふありても、いはねば、彼が心は、もはや知られましたれば、御赦し下されよとのさまふに、殿樣よも、いかにも、さうあらん。もはや問ても無用あれば、てのたびは、このまゝよ、赦しつかはもぞ。かさねて、過ちあき

やうにせよ。と仰せられて、かの袋の口を、御ときあうべしと、早々いねと推しやられた。

長四郎は、猫のやうに、まがって居たが、漸く袋を出されて、おじぎしながら、れそれ入りましたと涙こぼしていふ。やがて女中どもふも、禮してかへり行った。あとにて、女中どもあつまりて、大笑ひするに、殿様御臺所よむかひて、長四郎が、あの心がけにて、勤めなば、竹千代のためよね、双びなき忠臣であらうぞと仰せられて、夫よろこびあされたとのこと。

これよかはりて、若君の方よてね、夜べより、長四郎が居らぬから、大さわぎにて、君も御心安からぬ御もやうあれば、皆が

又曰、殿様の長四郎をとるしめたは、たの意、全く長四郎の忠義心を知らむとなりたりてはじめて四箇の疑を解く。絶妙。

氣を揉で居る所に、今かへりて来た故、大よろこひで、その譯を聞くと、只私が遅くまゐりましたがあるうでさりました、外に仔細はありませぬとのみいひて、何事もいはぬ。あとにて、袋政の事が、わかつて、笑つたり褒めたりして濟んざ。これね、慶長十一年のことであつて、竹千代君ね、稍く三ッにあらせられ長四郎ね十一の時であつた。

この竹千代君と申すね、德川御代々の中でも、尤名高き家光公即、大猷院殿の御幼名であつて、この長四郎とは、御老中の中でも、評判よかつた、松平伊豆守信綱である。三代様の御代の中は、いふまでもないが、四代家綱公の御幼きをも輔けて、政

又曰、竹千代君よあひてもまたたの實をつけど、長四郎の用意、字つし得ていをしろおもしろし。

又曰、結末の一句、小供よ對しては千言萬語よもまさる訓誡力あり勢あり。

を爲したは、この伊豆守であつた。人の上に立ち、百世の末までも手本となるよき人は、小供の時から、違つたものと見える。

直文評、兒童として文をよましめ、文を作らしめむとするには、談話よりちかきものよりはじめさるべからず。この文やよき讀本。よき文範。

又評、かの桃太郎、かの猿蟹合戰、かの花咲爺、舌切雀、カチくと山、皆陳腐に屬したり。今日にありては、別まれもしろき話をつくりて、家庭教育の材料とあさぐるべからず。この文の如き、またよくそれに適したるもの。

國文高等國語科講義錄　第三附錄

明治廿五年十二月廿七日印刷
同　年十二月廿八日出版

版權所有

編輯兼發行人　園田三郎　神田區仲猿樂町十五番地
印刷人　村井經次　麹町區飯田町二丁目三番地
發行所　國語傳習所　神田區仲猿樂町十五番地

四郎が侍り、長四郎が、居るところにも、君は必ずねらせられるといふほどであッた。かやうに、長四郎は御氣入であッても、そこしも、驕るこゝろもなく、我まゝあるふるまひもせず、たゞ君のおためく、と、夜も晝もおもうてゐた。大殿樣も、御臺樣も、長四郎は、よきつき人だ、と時々御褒美あど、下されて、おいたはりあそばせど、長四郎は、行届きませぬく、といッて、涙ぐまして喜びかしてまッてをる故女中どもゝ、めづらしき小供よと、ほめぬものはなかつた。

又曰、はじめて題をゆる。

ある日、大殿の、御寢殿の軒に、雀が、チヨッく、と、鳴いて居るに、若君御耳が留ッて、アレく、と御指さしあさる。皆ンナが

秋香曰、先其平日の事を敍して徐々本題に入る甚其体を得たり

ドコデスと眼を集めて、見ば、いかにも、御軒の瓦に、虫などくはへて、飛びまはりてをるは、巣をくつたと見える。雛は見えざるかとのび上りくそるに、尾の下より、喙さしだしたるがあるを女中ども、手をたゝいて、大さゞめきしてをる、若君も見ヤツくと仰せらるゝに、長四郎が、肩に御乘りあそばせとて、兩方の御足をシカと守りて御見せ申せば、よろこびたまひて、アレ取りてつかはせと仰せらる。

誰かこの御役は仕るあど申す中に、君は長四郎よくく、そちはあれをとりてまゐれ、と仰せらるゝに、長四郎は、ハイとかしこまる。かしてまつたれども、どうしたらば、逃さぬやうに、と